西土

XVII

西土

XVII

目次

わが心の揺籃 ― 絵解き物語り ―　浜野茂則　3

エジプト紀行　細田浩　23

慈光寺　濱野弘之　63

ひぐらしの夢　茂木光春　77

題字　茂木光春

表紙絵　浜野茂則

一　かぐや姫の竹の子

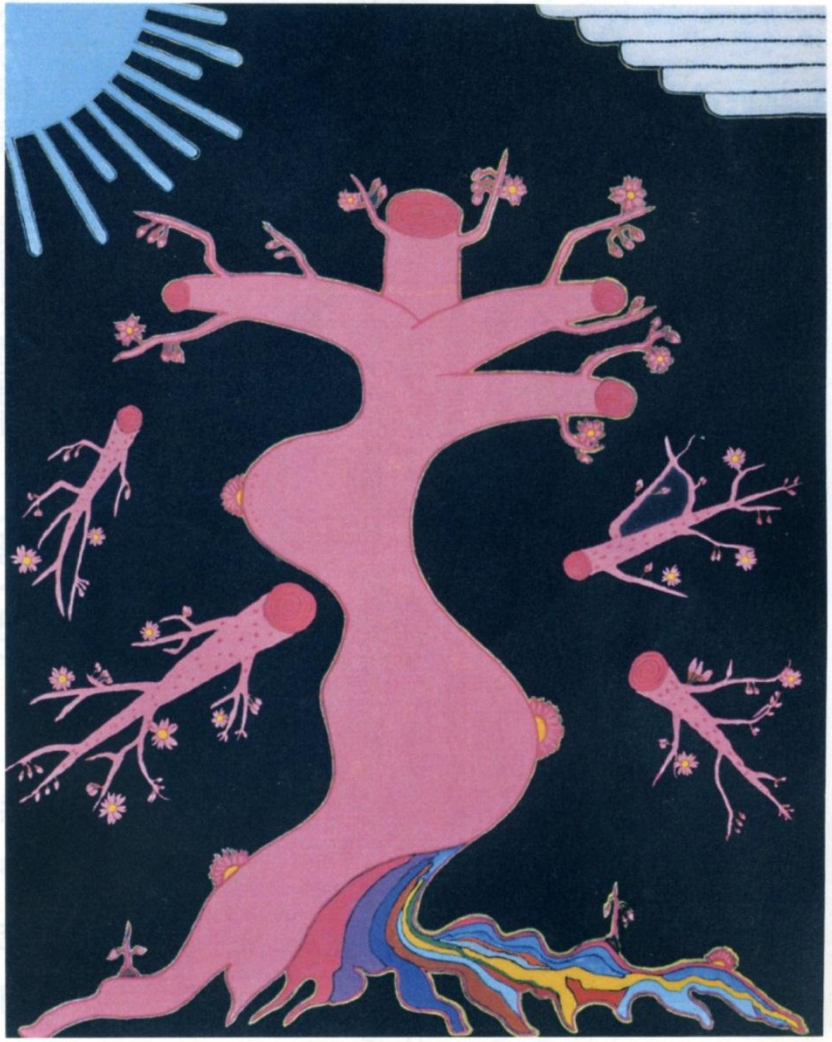
わが心の揺籃 ―絵解き物語り―（第一部）

浜　野　茂　則

一　かぐや姫の竹の子

六月から七月にかけて、私は竹の子（マダケ）を百本以上切らなければならない。長雨の後、太陽が出た朝など「そろそろ竹の子を切らなければ…ちょっと遅かったかな」と伐採用の山ガマを持って竹林に出かけるともう万事休すである。竹の子はもう竹になっている。一日に一米も伸びるのである。

地面に張りめぐらされた黄色い竹の地下茎があってどこからでも生えてくるのだ。切って水がほとばしるくらいのやわらかい竹でなければ処理できないのだ。竹の異常なほどの成長力には瞠目せざるをえない。まるで霊力があるのではと思わせる。昔の人が『竹取物語』に「かぐや姫」を設定して物語にしたのもうなずける。竹の精が満ち満ちている竹林にいると私は地面に張りめぐらされた地面に真白な「かぐや姫の観音」を想起する。そんな着想で描いたのが「かぐや姫の竹の子」である。



二　花は盛りに見るものかは

二　花は盛りに見るものかは

私の自宅の前は公園で一本の立派な桜の木がある。春にはその桜の花を見るのが楽しみだった。ところが、花が咲く前に管理組合の人が大胆に伐採してしまった。見るも無残で首なしトルソのように伐られている。しかし、何日かしてつぼみが残っていた桜の木のあちこちから芽吹くように桜が咲いた。下に落としてあった桜の枝からさえも花が咲いた。その桜の生命力に私は圧倒された。―そうだ、桜は伐られたのではない。自ら余分な枝を切り捨てて、「どうだ！」と桜は私たちに示して見せたのだと思ってみた。その時私は吉田兼好の『徒然草』の「花は盛りに」を思い出した。満開の桜の花ばかりがいいのではない。伐られた桜の木にも見所はあると思って描いたのがこの「花は盛りに見るものかは」である。

三　ヒロちゃんの思い出

三　ヒロちゃんの思い出

出野のヒロちゃんは怒ったことがない。いつもニコニコしている。イトコのヒロちゃんと私は兄弟のようだった。しょっちゅうどちらかの家に泊っていた。ヒロちゃんちは洋品店で私の家はタバコを中心の雑貨屋と農業の兼業だった。農繁期、特に麦刈りの頃になると明おじさん（ヒロちゃんのお父さん）と女中の姉やとヒロちゃんの三人乗りでオートバイで来てくれて手伝ってくれた。田舎にはまれな美しい姉やと村では珍しいバイクを見るのが私の楽しみだった。

高校生になると、ヒロちゃんはマンドリン部の部長となった。私にその音色をよく聞かせてくれた。卒業後ヒロちゃんは神田の呉服卸売専門店で修業した。私はあいまいな農業後継者だった。ヒロちゃんは思い立ったらどこへでも一人で行く。ビードロ一つ欲しくなると長崎まで行く。その頃、私よりも多くヒロちゃんは夢を語ってくれた。そんなヒロちゃんとの思い出の一枚だ。

四　大川さんちの不思議なトマト

四　大川さんちの不思議なトマト

「ジャックと豆の木」の豆の木のように天まで昇り、ぶどうのように実をつける不思議なトマトを描きたかった。大川庄平さんと私は熊谷の農業高校で一緒だった。いつも二人でバイクに乗って走りあるいていた。卒業の頃みんな不安だった。「百姓、やるー?」と声をかけあうのだった。「やるよー」と私も応えた。昭和四十一年なのに長男で農業をやるのは三割から二割だった。私は一年、目的もなく農業をやってから大学めざして予備校に通いはじめた。大川さんはビニールハウスでみんなからうまいと言われるトマト栽培をはじめて四十年。私にはなんだか、大川さんや他の農家仲間に申し訳ないような気持ちがある。くらがえしてしまって「ごめんね」というのがこの絵である。

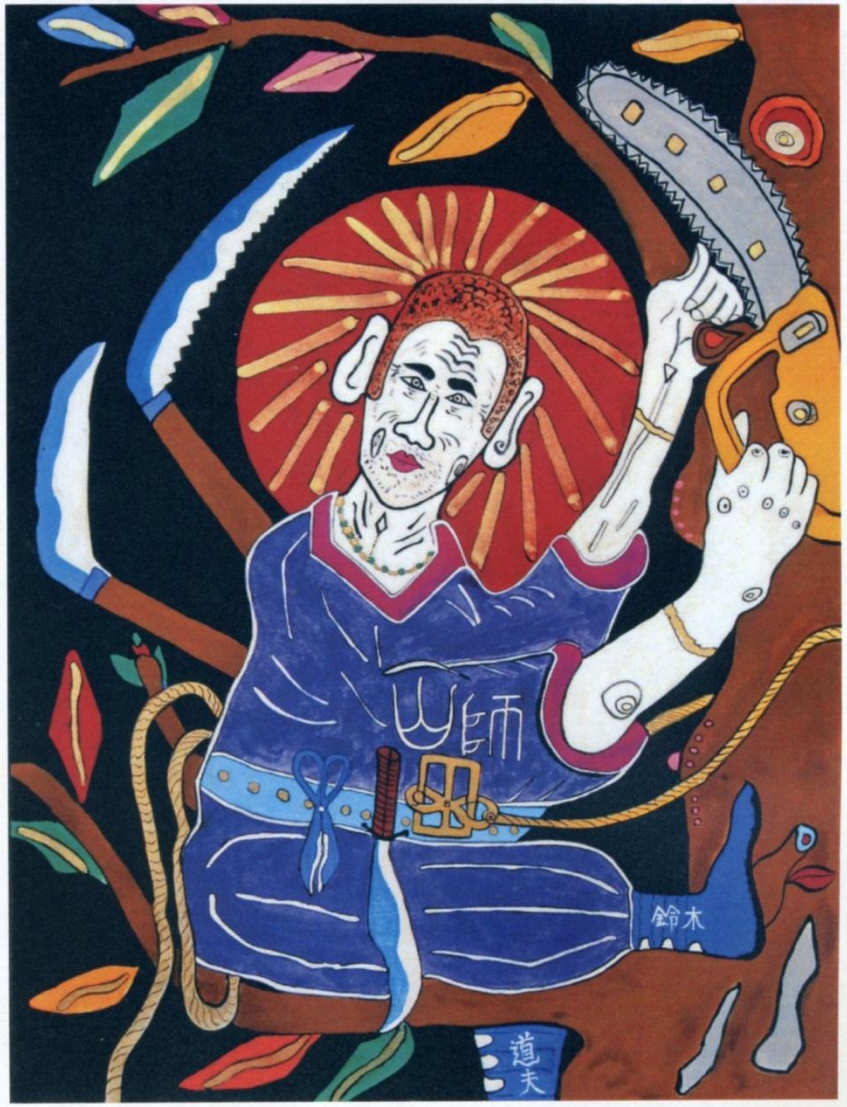
五　ここらでカンニンあっけらかん

五　ここらでカンニンあっけらかん

私の家は商売を縮小した後、農業が中心だった。農繁期になると近所の大塚勝っつあん夫婦はいつも手伝いに来てくれた。仕事が終わって夕飯時になると私は勝っつあんのすぐわきに座ってしまうのだった。酒がまわるとみんなを笑わせながら村の出来事、若い頃の思い出、戦争体験などいろいろな話をしてくれた。そして最後に私が「勝っつあん、あれ、あれやってよ」と言うと「シーボーに言われちゃやらねーわけにもいかねえ」と照れながら勝っつあんはおはこ（得意）の「カンカンづくし」をお碗のふちをハシでチンチン叩きながらやるのだった。

――カンカン坊さん鐘はたき、カンカン鳴らして寒祭り、観音様への願かけたお子供さんならカンづくし、羊カンキンカンのりのカン、ミカンに唐ガン寒卵、神田の乾物屋を買いしめて、お店がおかげですっからカン、小僧は魂（たま）げてトンチンカン、かじ屋は朝からトッテンカン、蒙古の王様ジンギスカン、夕刊朝刊指令官、士官は真先、それ、突貫、日本の兵隊皆勇敢、戦（いくさ）のことなら優秀官、知識のお蔵は博物館、出世のお手本リンカーン、僕の父さん高等官、まぬけた返事がチンプンカン、小学校は六年間、支那の難所は函谷関、寒梅寒竹寒牡丹、波を押し切る駆逐艦（くちくかん）、お日様カンカン、カンカン帽、ヤカン頭にクシきかん、五百羅漢の数よりもカンカンづくしは限りない、ここらでカンニンあっけらかん。

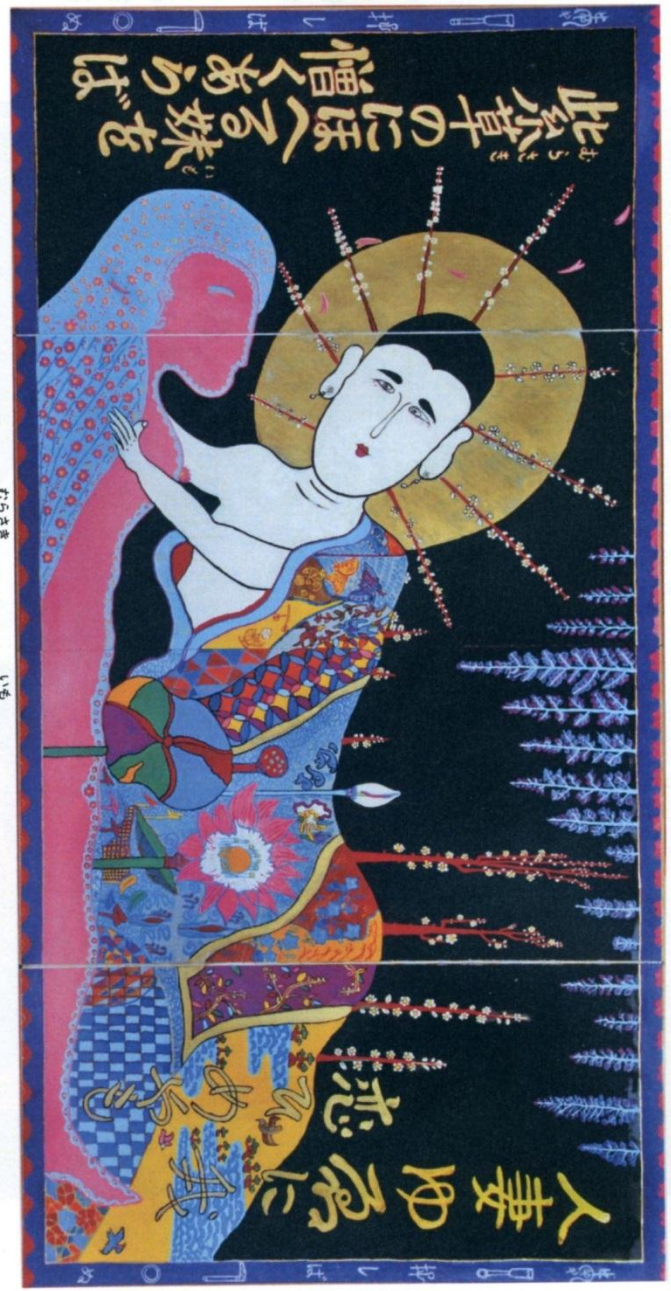
大塚勝雄九十二才、長生きしたかんかんづくしの勝っつあんも「ここらでカンニンあっけらかん」と亡くなって、すぐ裏の墓地に葬られた。その一枚がこれである。



六　山師　鈴木　道夫

六　山師　鈴木　道夫

伐採山師の鈴木道夫が八十才で亡くなった。「八十までは木に登る」と言っていたが、その予言通りだった。チェーンソーで自分の腕や太ももをザックリ切ると、「痛えーうちは生きてるって証拠だからねえ」と言ってアハハと笑う鈴木さんだった。木から落ちてロッコツがバラバラになるほど折れても不死鳥のように復活して、また木に登って伐採の仕事をした。安い賃金で人の何倍も仕事をした。鈴木さんは八〇キロの体重なのにスイスイと木に登る。腕が長い。「オレはケンカして負けたことねーよ」という。長い腕で相手のエリ首をつかんで突き放すと相手は何もできないという。鈴木さんは山師なのに首にはヤクザのような太い金のネックレスを二重にしている。まだまだこっちの方もいけますよーと小指を立てて、仕事が終わるとノーネクタイでスーツをひっかけて飲みに行く。チンピラが寄ってきて、「どこの組のものですか?」と酒をつぎにくる。「オラー、ただの百姓だよ」と言っても「いやーそんなことないでしょ。まあ、いっぱい」とさらにつぐ。酒酔運転で何度も事故を起こす。無免許になってもまだ酒を飲んで運転する。離婚し再婚し、浪費ぐせで無類のお人よし、だまされて田畑宅地売り払い、また酒を飲む。彼が刑務所から出てきたばかりの日に仕事を頼みに行った加藤植木屋さんはほうほうのていで逃げ帰ってきた。「おっかなくってあの人とはつきあっちゃいられねーよ。刑務所から帰って来た日にダンナ、まあ一杯って酒を出すんだからねえ」と加藤さんは語った。八十才の山師鈴木道夫は木の上の天寿を全うした。その一枚がこれである。



七　紫草のにほへる妹を憎くあらば

七　紫草のにほへる妹を憎くあらば

「紫草のにほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑに我恋ひめやも」この万葉の歌を絵にしたいと常日頃から思っていた。しかし、なかなか万葉の心をテーマにした納得の行く絵が描けなかった。ところが人との出会いによって一瞬にして着想できた。その経緯はこうだった。――私は退職した後、妻が経営する「カフェギャラリー寧」という店を手伝っていた。多くの客が引いた後、中年の男女がよく来てはコーヒーを飲んでいた。男性の方は時々ぶしつけに私に質問したり、声をかけた。「どれぐらいの敷地かね」「カフェなんかを恋女房とやれていい身分だ、左うちわだね」などと。そのうち私の方も平気で質問するようになった。全く唐突に「この女のこと好きなんですか？」と私は言ってしまった。「そんなことマスターに言われてもねえ」と言った後、男性は「そうだよ。オレたち不倫なんだよ」と始まった。神戸に資産五十億の会社を持っていたのだが、阪神大震災とバブルがはじけて五つの裁判を抱えて倒産寸前となって東京方面に出て来たのだそうだ。彼女と出合って、金持ちの友人がいるので、ウズベキスタンに二人で逃げようとしたら男性がガンに冒されていることがわかり、治療と金のやりくりに追われる始末なのだと言う。この二人の男女と私は急に親しくなった。男はKさん。女はOさんと呼ぶ。女性は知的で上品な感じだった。ある時、私に向って「オレが金を出すから、まあ座ってコーヒーでも」とKさんは言った。すると寡黙だったOさんが「あの話、浜野さんにしてあげれば」と言った。「そんな、オレのゲスワな人生なんか話したってしょーがないよ」と言いながらKさんは語り出した。学生運動の頃、学習院大出身で東大安田講堂に立てこもったのは自分を含めて五人位で、放水を受けて失神し、麹町署にもらいうけに来たオヤジに「テメェラごときが騒いだって世の中変わらねえんだ！」と思いっきり殴られた時のゲンコツは痛かったなァと言う。Kさんには武勇伝がいくつもある。還暦を過ぎてもベンツで時速

二〇〇キロで走ってしまう。まだ速度違反で捕まったことがない。ある時自分の車の前への割り込み方がひどいのでドナリつけた。するとヤクザっぽい若い運転手がドアを開けてドナリ返してきた。年はとってもスジを通すKはひかなかった。ヤクザ同志のケンカと見たドライバーたちはクラクションも鳴らさずおとなしく待っている。バイパスの二車線をふさいだ車の後ろはあっという間に渋滞となってしまった。上尾警察署のすぐそばの信号だったので警官が出てきた。「二人とも警察署に車を入れろ！」と二人の警官が逮捕する勢いでドナった。Kが「きさまァ、ケーサツにしょっぴかれるか、逃げるか？どっちにする！」とどなると「逃げる！」と若いのが言って、警官を振り切って猛発進した。時速一〇〇キロ以上で追いつ抜かれつ首都高まで来た。横につけた若いのが、「次のインターを下りて後をついて来い！」と言った。喫茶店の駐車場に入ると「シロウトにしちゃやるじゃねーか」と車の後部座席にいたカンロクのある五十男が出てきて「まあ、コーヒーでも」とコーヒーを奢ってもらって「じゃーな」仲良くなって帰ったと言う。後で知ったことだが、右翼系のヤクザの親分だったと言う。彼らが帰った後、私は二人の不倫の逃避行の行方知れずになったことが深く心に残って絵が描きたくなった。Kの面影に漂う仏顔梅の花が身体から出て紫の衣装を身につけている。女性的桜のイメージの像が左で彼を支えている。カンノン開きの表には「愛」という象形文字と色と図柄はウズベキスタンの国旗を使った。不思議な絵となった。二人のために絵を描いたと渡すと翌日Kさんから電話がかかってきた。「こんなに胸にガツンときたのははじめてだ」と言う。そしてアイサツに来た。何か礼をしたいが今金がない。感動したり、本当にお世話になった人には十一倍返せというのが代々の家訓なのだと言って、何十万もする高級カメラを、彼女は少ないけどと五万円を置いて行った。

ある時、「ねえ、あのハナシ、浜野さんにしてあげなさいよ、千代乃さんのハナシ」とOさんは言った。Kは「ハマさんにそんなゲスワなハナシをしてどーすんだよ」と言いながら話すのだ。「うちのおやじは都市銀行アメリカ支店長で終わった人だけどじいちゃんは富岡製糸工場の工場長でこれがやりたいほーだいの男だったんだ。これが四、五人の愛人がいてねぇ、臨終近くなった時、じいちゃん『千代乃を呼べ』と言ってね。銀座の一流所のママだった千代乃さんが病院へ駆けつけるとベッドの周りでチョロチョロしているオレを『五郎はあっちへ行ってろ！』と追い払うのでドアの外へ出てドアのスキマから中を見ていたらじいちゃん『千代乃、胸を出せ！』と言って、千代乃さんが『はい』と言って胸を出すと、じいちゃんオッパイをにぎってちゅーちゅー吸ってた」―「それがオレの幼少時代の原風景よ」と言った。「それで五郎さん、その時どんな感じで見てたんですか？」と私が聞くと「どーもこーもねーよ。リンジューにオッパイチューチューだもの。そらーもう荘厳そのものだよ」と言った。

私は二人が帰った後、母屋の仏間でKさんの幼少年期と数々の武勇伝と挫折した不倫の愛を反芻していた。そして瞬時にして私の脳裏にひらめいた。

「紫草のにほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑに我恋ひめやも」の万葉の天武天皇（大海人皇子）の額田王への恋歌が映像となってひらめいた。その絵が四枚屏風に描いた「紫草のにほへる妹を憎くあらば」である。

八　赤と黒の群像

八　赤と黒の群像

「アッパーカット」の三森さんが訪ねてきた。北上尾駅の上尾高校側に美容店を出すのでその看板を描いてくれと言うのだ。ちょっとためらったが引き受けた。炎のようなコンブのような髪型、中性的なスラリとした女性像が一対、黒をバックに白ヌキの赤、下にアッパーカットと書いてあるだけの看板だ。少ない色でどこまで印象的な立像が描けるかがポイントだった。その後私はこの看板を原形にして何か絵を描いてみようと思っていた。

五人の赤黒の像が対になっている。下の方には手がいくつも張りついている。だまし絵のような「赤と黒の群像」F一〇〇号が誕生した。二〇一二年春、日仏現代国際美術展（上野の都美術館）に出品することができた。

付　記

作家茂木光春氏から手紙が来た。

「いきなり傑作が現れたという印象をまず受けました。第二のダリの出現ですね。すごいというか、すばらしいというか、とにかく大変面白かった。ダマシ絵というか、トリック絵というか、西洋でいえばトロンプ・ルーイというそうですが、幻想的で幻想を越え、象徴的で象徴を越え、単純明快で謎に満ち、深くして浅く、浅くして深く、見た通りでありながらいくらでも意味を持っているようで、実に楽しい絵、世界のどこへ持って行っても恥ずかしくない絵。とにかく水ぎわだった超モダンな絵でした。」

私は「茂木光春賞をいただいたと思っていいですか」と返信した。

九　熱誠童子

九　熱誠童子

茂木光春氏が「赤と黒の群像」を見に行ってくれた。彼は「秀逸、世界のどこへ出しても恥ずかしくない作品」と絶賛してくれた。そんな手紙をもらった時期に茂木氏自身の作品「わが愛する明恵上人」が文庫本として出版しないかという話が、ある出版社からあったというのを聞いて、私はプロのデザイナーが出版社にはいるでしょうが、一つの選択肢として私に表紙絵を描かしてくれないかと申し出た。明恵上人が禅の神髄を表現した「あかあかあかやあかあかや」とか「月いいい」という言葉が私の胸に強く残っていた。茂木氏が賛辞をくれた「赤と黒の群像」と座禅のイメージが繋がった。そして一つの参考選択肢の表紙絵が出来上がった。私は表紙絵のデザイン、そして帯文なども書いて茂木氏に送った。それらの私の行為に対して茂木氏は「熱誠」という言葉を使ってきた。「熱声いまだやまざるに…」という言葉は知っているが「熱誠」は知らなかった。新鮮だった。まさに仏陀への純な思い、明恵上人ともつながる心、邪悪な私の心の中にも、いや万人の胸にも宿っている心―それが「熱誠」熱き誠。私は座禅する赤と黒の群像を「熱誠童子」と名づけた。この一枚、「あかあかあかや」と「月いいい」である。

追　伸

私の絵は人である。人との出合い、人生の物語、感動からしかはじまらないのである。植物だって人間になってしまう、人間だって植物になってしまう。なぜそんなにも土地を風土を愛せるのかと私に質問した人がいる。よくわからないけれど土着と私の生命は繋がっているという思いはある。それが「熱誠」につながるような気もする。とにかく私の絵の手法は心の泉に湧いたイメージを形にするだけなのだ。風景を示されたり、目の前に対象物を置いてしっかり観察して描けと言われると私の筆は萎縮して鈍るばかりなのである。見ない。私は心で描くのである。